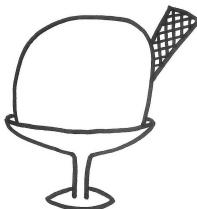


さくら



令和7年12月23日(火)

祖母と「おじや」と「アイスクリン」



私は三世代同居の家庭で育ちました。初孫だったこともあり、祖父母は私をとても可愛がってくれました。母が仕事をしていたため、祖母は私にとって母親のような存在でした。

幼い頃の私は体が弱く、小学校4年生くらいまでは、しおらう学校を休んでいました。そんな時、いつも看病してくれたのは祖母でした。

小学3年生の頃だったでしょうか、数日間学校を休み、久しぶりに登校した日のことです。算数の時間、三桁かける一桁のかけ算の小テストがありました。授業を欠席していた私には、解き方が全く分かりません。問題を前に固まってしまっている私を見て、担任の先生はこう言いました。「こんな問題も解けないの」

その言葉は、深く心に突き刺さりました。「絶対にこんな大人にはならない」、と強く感じたことを覚えています。

帰宅して祖母にその話をすると、祖母は私に二つの大切なことを教えてくれました。「今できていないことでも、努力すれば必ずできるようになる。人と同じ早さで歩む必要はない」。「人から嫌なことを言われても、やり返したり恨んだりしてはいけない。そんなことをしたら、あなたもその人と同じになってしまうから」。

この教えは、今の私の生き方に大きく影響しています。

看病してもらった思い出は、忘れられない「味」にもあります。体調不良で学校を休んだとき、祖母はいつも出汁にご飯を入れ、卵でとじた「おじや」を作ってくれました。そして食後には、九条の商店街で買ってきた「アイスクリン」を食べさせてくれるのでした。濃厚なアイスクリームではなく、さらっとしていて喉越し爽やかなアイスクリン。火照った体には何よりのごちそうでした。

この土日、久しぶりに体調を崩して病院で点滴を受けました。処置が早かったおかげで回復に向かいましたが、病院のベッドで横になっていると、買い物に出た妻から「何か欲しいものはある?」とラインが届きました。私は迷わず「アイスクリンを買ってきて」と返信しました。

帰宅して冷凍庫を開けると、そこに入っていたのはアイスクリームでした。きっと、あのアイスクリンはもうどこにも売っていないでしょう。妻の心遣いに感謝しながら口にするアイスクリームは、それはそれで美味しいものでした。けれど私の心には、あの「おじや」と「アイスクリン」の味が、祖母の味としていつまでも残っているのです。

学校ホームページで、日々の教育活動のようすを公開しています。どうぞ、本校ホームページを閲覧してください。

